

創刊の辞

内なる権威の創造をめざして

人間科学部長 宇都榮子



ここに、『専修人間科学論集 心理学篇』並びに『専修人間科学論集 社会学篇』創刊号を皆さまにお届けすることができ、心より嬉しく思います。

人間科学部は、専修大学130年を記念して、専修大学7番目の学部として2010年4月に開設されました。といいましても、人間科学部は、何の実績もなく、これからその礎を築いていくというのではなく、1966年に開設された文学部における、人文学科心理学コース、社会文化コースにはじまる40年を超える研究・教育の実績の上に、文学部心理学科、人文学科社会学専攻が共同して、21世紀の時代の要請にこたえるべく発足した学部です。

学部開設前から、学部の論集の発刊をどのような形で実現するかは、私たちにとって大きな検討課題の一つでした。学部の研究、教育の発信の場の確保はとても大切なことだからです。心理学科、社会学科の教員が集まり、何度も論議を重ねて、心理学篇、社会学篇の2冊を学部論集として発刊することにしました。そのほうが、それぞれの学問研究を深めて発信できると考えたからです。

日本を代表する社会学者の一人に有賀喜左衛門（1897-1979）という人がいます。有賀先生の弟子の米地實先生が、大学院の院生時代に、ある人が、特定の学術雑誌に掲載されたものでなければ論文としては価値がないと言っていると有賀先生に話したところ、たとえ謄写印刷であっても誰でも読むことのできる形で公表されていればよく、どういう雑誌に掲載されたものかは問題ではないと言われたそうです。それは、誰もが読むことのできる形になれば公表されることになるわけですから、それを読んで反論することもできるし、触発されたり、世紀の大発見につながったりとすることができるからでしょう。有賀先生の代表的な論文に「捨子の話」（『法律新聞』第3508-10, 3513, 3515, 3517-3520, 1933年1月30日～2月28日）という論文があります。この論文は先生の学問の出発点になるもので、著作集のなかでも重要な論文として位置付けられています。米地實先生が慶應義塾大学図書館でこの論文が掲載されている『法律新聞』を見つけ出され、後に『有賀喜左衛門著作集Ⅷ』（未来社刊, 1969年）に掲載されることになりました。米地先生がこの論文を見つけられた時、有賀先生は、この論文のことを忘れておられたそうです。これも、印刷になって公表されていたので、目の目を見ることができました。

有賀先生は、日本女子大学の学長をされていた時、学生の合唱団のコンサートなどに招待されることもあり、そのパンフレットに記事を求められることもありました。そんな時、たとえ、400字でも800字でも何度も推敲を重ね、原稿を作っておられました。どんな小文であってもおろそかにしない、そんな先生だったからこそ、世界的に権威があると位置付けられている学術雑誌であろうが位置付けられていないものであろうが、印刷の形で人に公表されていればいいのだということなのだったと思うのです。私たち人間科学部に関係するものも、有賀先生のような気概で論集を創りあげて行きたいものだと思います。他人の権威に頼るのではなく、内なる権威を創りあげることができるような論集に育ちあげていきたいものです。